



愛研技術通信

アフリカ旅行記～ケニア10+1日間の旅～

技術部 正木 浩貴

2007年5月17日、僕は新婚旅行でケニアへ行ってきました。ケニアという国を簡単に紹介しますと、正式名称は『ケニア共和国』、赤道上のアフリカ大陸の東海岸に位置し、国境は、東にソマリア、西にウガンダ、南にタンザニア、北にエチオピアとスーダンと接しています。面積は日本の約1.5倍、日本との時差はマイナス6時間。首都はナイロビで、言語はスワヒリ語と英語、その他40以上もの民族の言葉も話されています。

さてさて、17日の夜から中部国際空港 ドバイ ナイロビという空路で行ったわけですが、この移動時間が長い長い...日本からドバイまで約10時間、ドバイでのトランジットタイムが約5時間、そしてドバイからナイロビまでが約5時間と、移動だけで1日が終了。ナイロビ・ジョモケニヤツタ国際空港に到着した時には二人ともヘロヘロになっていました。入国手続きを済ませた後に現地係員の方と合流し、日本語ガイドの『チャーリー』と、ドライバーの『ニコラス』を紹介されました。この二人と旅行の全行程を共にしたわけですが、まあほんとにいるいろやらかしてくれました！そのお話はまた後ほど...。ちなみに、二人の名前はクリスチャンネームで、ケニア人のほとんどがキリスト教徒とのことでした。一部部族名もあるみたいなのですが、ほとんどの人がクリスチャンネームを使っているらしいです。到着したその日は、そのままナイロビ市内のホテルで泊まりました。

旅行3日目

この日はケニア南部にある『アンボセリ国立公園』に行く為、早朝にホテルを出発したのですが、そこへ行くまでの道がまあひどいのなんの。ナイロビ市内は舗装されているのですが、ちょっと町から外れると穴はあいているし、歩道と車道の境目もいり加減。途中、目を疑うような補修工事現場を目撃してしまいました。そこにいたのはアスファルトを穴に敷き詰めてスコップで叩くおっちゃん達。その上をまた車が走り、撒き散らされるアスファルト...。現地係員の方から「ケニア人はいり加減」と聞いていたのですが、まさにその通りでしたね(笑)。そんなこんなでホテルを出発して約4時間後、アンボセリ国立公園に到着！キリマンジャロを間近で眺めることができる公園として、ケニアの自然保護区の中でも人気の高い場所です。公園といってもそこにいるのはみんな野生の動物で、公園内にあるロッジに向かう途中でシマウマやヌー、ガゼルなどの草食動物と遭遇しました。まだ本格的なドライブサファリではなかったのですが、シマウマを発見した時は二人とも興奮しまくりでした！ロッジでチェックインを済ませ、昼食をとった後に、今回最初のドライブサファリに出発。チャーリーのガイドを聞きながら、約2時間公園内をドライブしました。アンボセリでは二泊する予定だったので、この日は1回のサファリで終了しました。ただ車に乗っているだけなんです、それが意外と疲れるもので、夕食をとった後すぐに寝てしまいました。ちなみに料理は肉料理が中心の西洋風。牛・豚・鶏が一般的に食べられている肉ですが、ダチョウやワニの肉も食べることができました。ワニはちょっと硬かったけど、ダチョウはかなり美味しかったです！

4日目

この日は、あるものを見る為に夜明けとともに起床しました。前日も見えたのですが、早朝の方がきれいに見えるということで、がんばって早起きしました。まだ眠たい目をこすり、寒さに震えながらその見えるところまで歩くこと数十秒...目に飛び込んできたのは、雲一つない朝焼けの空の下に聳える霊峰キリマンジャロ！スワヒリ語で《輝く山》



を意味するそうですが、山頂の雪が朝日に照らされキラキラと輝くその姿はまさにその名の通りでした。あまりの感動に言葉も出ず、寒さも忘れてずっと眺めていました。

朝食を済ませ、少し休憩した後に日本でも有名なマサイ族の村を訪問！少しドキドキしながら村の入口まで来ると、一人の青年がこちらに近づいてきました。その青年の名前は『チャールズ』。長老の息子で、今回村の案内役としていろいろなことを教えてくれました。まず、若い男性と女性が村の外に出てきて、歓迎の歌と踊りを披露。

その迫力というか異様な雰囲気によって圧倒されつつ、村の中に案内され、火のおこし方や、マサイ族の生活や家の造り方について教えてくれました。日本では「マサイ族＝戦士」という印象があるかとは思いますが、実際は、牛やヤギの放牧をしながら生計をたてている農耕民族です。一応、野生の動物から村や自分達を守る為に武器はあるみたいです。みんな明るくて、わかりやすい英語でいろいろと話し掛けてきてくれました。「東京から来たの？」と聞かれたので、「豊田から来ました」と答えたら首をかしげられ、ちょっとショックを感じながらも「名古屋からです」と言い直したら今度は大爆笑されました。彼らの中で名古屋という街はどんなことになっているんでしょうかねえ…。言葉は上手く通じなくても、笑顔で接してくれる村の人たちの温かみを感じ、最後は握手をして別れました。夕方にまたサファリへと出かけ、公園内で唯一歩く事が許可されている『オブザベシオンヒル』という丘へ行きました。その丘から眺めるアンボセリの草原はまた壮大で、時間が過ぎるのも忘れてしばらくの間ボーッと眺めていました。

5日目

この日は移動距離が長いので、朝5時前に起きて、6時にはロッジを出発。約7時間かけて到着したのが『アバーディア国立公園』。アンボセリとは正反対で、山に囲まれた森の中にある保護区です。



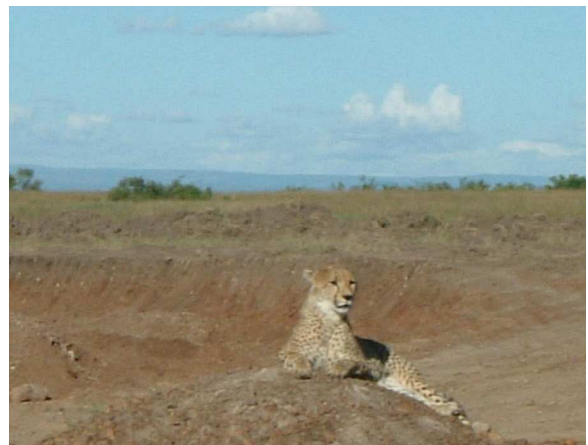
ここで宿泊したのが『ツリートップス』という名のロッジ。あのエリザベス女王も訪れたことがあることでも有名で、宿泊中に前の王が死去したために、ここで王女から女王に即位したという由緒正しき宿です。名前の通り樹上に建っているユニークな造りで、ロッジの前には水場と塩がまいてあり、水と塩分を求めて動物達が集まってきていました。その動物達を部屋やロビーで寛ぎながら見るという、なんとも優雅な一時を過ごせました。

6日目

この日はフラミンゴで有名な『ナクル湖国立公園』へ。早朝にアバーディアを出発し、途中赤道付近の休憩所に寄りました。そこが赤道上にあるという証拠の実験を見せてもらい、赤道上に立ったという証明書を貰いました。正確には売りつけられたんですけどね…。ちなみに証明書1枚300Ksh(ケニアシリング)、日本円にして約600円です。他にも寄り道しつつ、公園に到着して園内のロッジへ。この公園は、ナクルという大きな湖に隣接している為、他の保護区に比べるとそれ程広くありません。この公園の見所は湖の畔一帯をピンクに染めるフラミンゴ！ちょうど僕達が行った時期は数が少ないときだったので、それでもあまりの多さにビックリしました。タンザニアにある湖とこのナクル湖を行ったり来たりしているらしく、9月以降のベストシーズンと呼ばれる時期が一番凄いとのことでした。ここは湖の畔なら下車することが許可されていて、フラミンゴの大群を目の前で見ることができます。車から降りてみると、足元には糞がいっぱい！湖も糞がいっぱい浮いていて、臭いも相当なものでした。でも、檻もなにもない状態で間近に見られるので、全然嫌ではありませんでした。

7日目

旅行も終盤にさしかかり、ケニア滞在もあと3日。最後に連泊したのが『マサイマラ国立保護区』。アフリカに少しでも興味のある方なら、この名前を耳にしたことはあると思います。タンザニアとの国境を跨いでいる保護区で、タンザニア側では『セレンゲティ国立公園』と呼ばれています。ここでは草食動物の数が非常に多いこともあって、ライオンなどの肉食動物が見られる確率が高いらしく、かなり期待していました。いつものようにサファリをしていると、チャリーから「ライオンがいるみたいなのでそこに向かいます」と言ってきました。サファリカーのなかには無線機が積んであり、他のサファリカー同士で情報の交換をしています。チャリーが情報を提供している姿は一回も見えていませんけどね(笑)。その場に到



着すると、二匹のライオンが寝ていました。やはりどこの国の観光客もライオンは見たいらしく、その二匹を5、6台の車で囲んでいました。ちなみにベストシーズンになると、観光客も倍以上に増えるらしく、一匹のライオンやチーターを数十台のサファリカーで囲むことは珍しくないそうです。ここでは、チーターが水を飲んでいるところや、ライオンが狩りをしようとしているところなど、なかなか見られない姿を見ることができました。そろそろサファリも終わってロッジに戻るかなと思っていたら、ヒョウを発見したという無線連絡が！ヒョウは夜行性のうえに藪の中に潜んでいるため、一日中サファリをしていても滅多に見つからないらしく、たった2時間程度のサファリで見られたら相当ラッキーだと言われていました。急いで現場に急行したのですが、残念なことにもう立ち去った後で、ヒョウがいたと思われる場所には草食動物のインパラの残骸が残っていました。食事中にたくさん車が来たから警戒していなくなってしまったのでしょうか。あきらめて引き返そうと車をバックさせた瞬間、アクシデントが！「メキャッ！」車後方から聞きなれない音が…。どうもタイヤ部分の何かが折れたらしく、修理の為ニコラスを一人残し、僕達は他のサファリカーに乗せてもらいロッジまで戻りました。夕方には直ったらしく、ニコラスもロッジへ戻ってきていました。次の日はオプションで頼んであったバルーンに乗ることになっており、それについてチャーリーと打ち合わせをしているときにまたアクシデントが！バルーン会社のミスなのか、肝心のパイロットがいなくて翌日のフライトは中止になってしまいました。そのまた翌日ならいるということで、どうしてもバルーンに乗りたかった僕達は急遽プランを変更。二日後は朝食を済ませてからナイロビまで戻り、ナイロビ市内のレストランでゆっくり昼食をとってから日本へ帰る予定だったのを、朝バルーンに乗って、ロッジで作ってもらった弁当を車の中で食べながら直接空港へ行くという、ちょっと無謀ともいえる計画を立てました。チャーリーも、ゆっくりはできないけど時間的には十分余裕があると言ったので、それを信じて最後の日を迎えることにしました。

ケニア滞在最終日

朝5時半にバルーン搭乗者はロビーに集合し、乗り場まで歩いて移動。そこで、着地するときの体勢や、飛行中の注意を受けました。すべて英語なのであまり理解できませんでしたが…。本当ならその場チャーリーも来る約束だったのですが、寝坊でもしたのか姿は見えませんでした。今日中に日本へ帰ることをバルーン会社の人が知っているのか不安になりましたが、僕の英会話は中1並…。それを伝えることもできないので諦めて乗り込んでしまいました。バルーンも膨らみよいよ出発！バスケットが少し浮いたかな？と思ったのもつかの間。みるみるうちに上昇し、あっという間に手を振るスタッフ達の姿が点になっていきました。空から眺める大草原もまた格別で、さっきまで心配していたことなどすっかり忘れてしていました。乗客の中で日本人は僕達だけ（このツアーも二人だけ）だったので、アメリカ人パイロットが親切に分かり易い英語でいろいろ説明してくれました。約30～40分ほどのフライトを終え、着地した後はその場でシャンパン・ブレイクファースト。大草原のど真ん中で、シャンパンを飲みながらできたのパンやハムを食べると、なんとも言えない贅沢な朝食でした。スタッフは僕達が急いでいることをちゃんと知っていて、



食べ終わるとすぐにロッジまで送ってくれました。ロッジに到着するとチャーリーがお出迎え。「楽しかったですか～？」なんて、寝坊したのに悪びれた様子もなく笑顔で近づいて来ました。まあ、まだ時間にも余裕はあったし、無事に戻ってこられたので特に何か言うことはしませんでした。弁当を受け取ってロッジを後にした僕達は一路ナイロビへ。これで最後だと思つと名残惜しくて、ろくに会話もせず、ただただ外の景色を眺めていました。3時間ほど走ったところでガソリンスタンドに入っていったので、給油かな？と思ったら二日前に壊れた部分を修理してもらおうと言い出したのでちょっと焦りました。この時フライトまで5時間をきっていて、ナイロビまでまだ2、3時間かかるだろうと思っていたので、お土産が買えるか心配でした。チャーリーの話だと20分もあれば直るとのことだったので、急いで買えば大丈夫だろうと思つ

ていたのに、20分が過ぎ、30分が過ぎ、結局直ったのは1時間くらい経ってから。さすがにみんな焦りだして、急いでナイロビへ。残り時間1時間半くらいでナイロビ市内へ入り、少し安心したのもつかの間。今度はとんでもない大渋滞にはまってしまいました。もうお土産は諦めようかと思っていたけど、チャーリーが「まだ大丈夫だからスーパーに行きましょう」と言うので、急いでスーパーに入り紅茶とコーヒーを購入。残り時間40分をきったところで空港に到着！車から飛び出し、出国ゲートまで走っていくと、向こうから現地係員の方が歩いて来ました。その人の表情を見た瞬間、最悪な状況が頭に浮かびました…飛行機の乗り遅れ。まさかとは思いましたが、そのまさかでした。搭乗受付がフライト時間の40分前に締め切られるらしく、ギリギリアウト。次の便は丸一日後にしかないということで、なんとケニアにもう一泊することに！旅行会社側の不手際ということで、ホテル代から飲食代、次の日のフライト時間までの特別観光プランなど、すべて負担してくれました。一日遅れてもお互い仕事には影響なかったもので、なんかちょっと得した気分になってしまいました。一応自宅に連絡し、この日はホテルに入ってすぐに寝てしまいました。

おまけの1日

この日は午前中にゾウの孤児院へ連れて行ってくれることになっていました。ゾウの孤児院とは、群れからはぐれてしまった子供のゾウを保護し、また野生に戻れるように訓練をしているところだそうです。一般公開されているのは朝11時から12時までの1

時間だけなので、ホテルのロビーに10時集合だったのに、ニコラスが大遅刻で1時間も遅れてきました。

なんとか閉まる30分前に到着し、ゾウも見られたし、触ることもできました！なんか細かくて堅い毛が生えていて、五分狩り頭をなでているみたいで触り心地はよかったです。ゾウの孤児院を後にし、今度はジラフセンターという所へ連れて行ってもらいました。内戦やハンティング、環境悪化によって絶滅の危機に瀕していたキリンを保護・育成している施設だそうです。ここでは、直接キリンに触ることもでき、餌をあげることもできます。お腹を空かしていたのか、餌をもって展望台みたいなのところの上ると、数頭のキリンが一斉に寄って来て、正直ちょっとびびりました。キリンに餌をあげたり首に抱きついたり、とても貴重な経験をさせてもらい、「飛行機乗り遅れてよかったかも」なんて思っていました。まだまだ時間はあったのですが、前日のようにならないためにも早めに移動。途中、現地係員さんとも合流し、出国手続きの説明を受け、係員さんとニコラスにお別れをして空港内へ。チャリーはサッカーの試合があるということで空港へ向かう途中でお別れしました。荷物検査でちょっとひっかかりましたがなんとかケニアを出国できました。また20時間ほどかけて日本に帰国。無事に帰ることができました。



ケニアに行って、僕の頭の中の常識というものが覆される出来事ばかりでしたが、こんなにいろいろ経験できて本当によかったです！新婚旅行でケニア！？と思われたかもしれませんが、こんなに内容の濃い観光地は他にはないでしょう。みなさんも一度行ってみてはいかがでしょうか。ここに書ききれなかったこともいっぱいあります。また興味のある方は聞きにきてください！

編集後記

先週後半、日本を襲った台風4号は、この時期としては異例の「強力台風」だったそうです。気象庁は、南米ペルー沖から中部太平洋赤道海域までの海水温がいつもの年より0.5度以上低くなるラニーニャ現象（ラニーニャはスペイン語で「女の子」という意味。逆にペルー沖の海水温が高まる現象をエルニーニョ現象といい、「男の子」という意味）が、この4月から起きていると報じています（朝日新聞'07.7.11）。この現象は、赤道付近で吹いている東からの貿易風が数年周期で強まり、この東風によって、太平洋東部の温かい海水は西側に流され、それを補うように深層から冷たい海水がわき上がって形成されるといいます。一方、西部のインドネシア周辺には温かい海水が集まり、このため雨雲形成が活発になって、今回の雨台風をもたらした原因の一つと推測されます。この半世紀余りでラニーニャ現象は12回発生しているらしく、この現象が発生すると、今夏、猛暑になりやすいとされていますので、呉々もご自愛下さい。

愛研技術通信を昨年12月に発行して以来、今回でちょうど第12号を迎えることになりました。一二進法の由来の一つに、1年が12ヶ月（満月と新月がほぼ12回、 $360 \div 30 = 12$ ）に因むという説があり、メソポタミア文明では、これが1年12ヶ月とする暦法となり、12は30と並んで、主に時間を示すときの基数となったといわれます。このほかにも、12年を一回り、24の時間を1日、60分を1時間、60秒を1分とする時間の単位がつけられました。全て12の倍数です。中国でも、1年を十二支で呼び、十干を合わせて千支は60年で一周する習わしがあります。いずれにしても、1年を満たずに愛研技術通信第12号を発行したことになります。

この区切りのいいときに、技術部の正木さんからこの5月に新婚旅行（ご結婚おめでとうございました。）で行かれたアフリカ旅行記を寄稿していただきました。おかげさまでいっしょに、楽しい技術通信になったと感謝しています。この旅行記を読み、うっとうしい梅雨気分が少しでも和らぐなら幸いです。

この通信誌の発行目的は、一人一人が持っている様々な情報、企画、知識などをお互いが共有し、社員間のコミュニケーションが活発になることを期待してはじめてのものです。これからも、今回のような楽しい記事を交えて24号、60号、120号へと続くことを強く願い、これからも皆さんからたくさんの寄稿を期待しています。（2007.7.15 T.T記）